平成３０年度　藤沢市市民活動推進委員会第２回分科会　議事録

１　日　時

２０１８年（平成３０年）９月２６日（水）午後６時～午後８時１０分

２　場　所

本庁舎７階　７－３会議室

３　出席者

（１）委員　１１人

中島委員長、山岡副委員長、阿部委員、金子委員、木村委員、坂井委員、手塚委員、仲田委員、西貝委員、細沼委員、村上委員

（２）市側　４人

宮原参事、濱野課長補佐、髙橋上級主査、緒方主任

４　議　題

（１）市民活動推進計画の改定について

５　配布資料

（１） 次期市民活動推進計画（素案 Vers.3）

（２） 平成３０年度　藤沢市市民活動推進委員会分科会　議事録

（３） 他市の計画（抜粋）

（４） ビジョン・キーワード

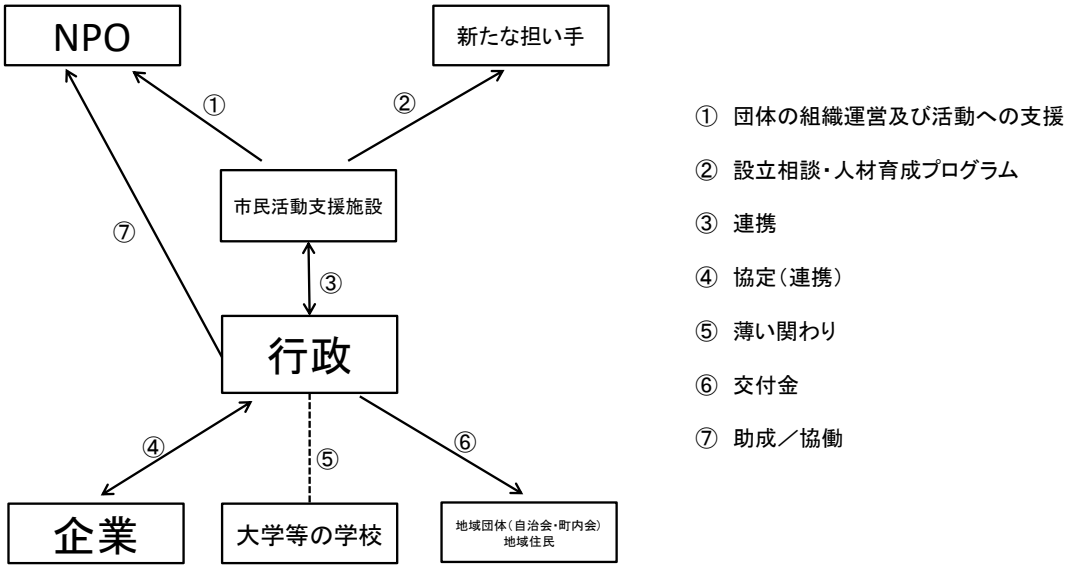
６　開催概要

議題１　市民活動推進計画の改定について

（宮原参事）議題１の市民活動推進計画の改定、ということでお話をさせていただきたいと思います。Vers.３ということでお送りさせていただいておりますけれど、今日は、やり方を変えてみまして、ワークショップみたいな形でやりたいと思っています。というのは、Vers.3を事務局のほうで作成させていただきましたが、事務局としてもまだまだ迷いの部分があったり、事務局で素案を作成してみなさんにご審議いただくといったところは、今までの審議会とやり方が同じではないか、という部分と、折角多岐にわたるジャンル、カテゴリーの中から出てきていただいている委員さんの専門性や想いを生かし切れていないのではないか、という懸念がありますので、Vers.3 についてはのちほど、ご意見をいただきたいと思いますが、まずは、市民活動のいわゆる推進ビジョンを決めていくのをゴールにしたいと思います。できれば、ビジョンを決めて、市民活動推進計画の３つの基本方針、Vers.3 でも書いていますが、３つの基本方針の一つ一つがアウトリーチ、ネットワーク、ボトムアップ、そういったものを連想させるような基本方針まで策定できればと期待しております。

本日、ホワイトボードを用意させていただいて、藤沢の現状というものをお示しさせていただきたいと思っております。その現状をご覧になっていただいて、皆さんの専門性とかコメントをいただきながら、藤沢市に足りないものや、あるべき姿や、ここにはこういう線が必要なんじゃないかなど、それをボトムアップ、アウトリーチとかネットワークという考え方を生かしながら、ここにはこういう線が必要じゃないかとか、例えば、市民活動支援施設と行政の関係は③で連携となっています。連携でいいのかというような、そういったものをワークショップみたいな形でやらせていただければと思っております。

（中島委員長）今、宮原参事からお話がありましたように、ゴールとしては推進ビジョンと３つの基本指針ですね。３つのキーワードにつながるような基本方針を決められるといい、ということです。お手元に推進計画の素案 Vers.3 がありますが、前回からずいぶん変わって



いるところもありますが、３つのキーワードはこれでいいかというのを確認したいと思います。基本指針のカッコ書きのキーワード、ボトムアップ、アウトリーチ、ネットワークとありますが、これでいいかということです。アウトリーチって言葉はちょっと行政の視点が匂う気がします。届ける人と受ける人っていう、そこに断絶があるように感じます、市民的な発想では。まちづくりでアウトリーチって結構最近言うんですが、参加できない人に行政の方が出向いて行って、提供する側が出向いて行って、意見を聞いてそれを活かすという感じで。これは、私の勝手な思い込みかもしれませんので、ここで言うアウトリーチ、市民活動とかまちづくりにおけるアウトリーチっていうのはこういうことなんだよ、というのがあったらお願いします。ただ、いずれにせよ、ちょっとだけ時間をいただいて、この３つの基本指針はすごく大事で、この言葉に基づいて、具体的な表現にするということですので。村上さんは一番アウトリーチの現場にいますかね。

（村上委員）そうですね。福祉の視点からいうと、手を差し伸べてすくいあげるという感じですね。

（中島委員長）私もそのイメージです。

（村上委員）ただ、ここで言っているのは、たぶん支援をしていく、っていう意味合いなのかな、と思います。

（宮原参事）アウトリーチという言葉を使ったのは、これからの人口構造や少子化高齢化といった人口構造の変化、いわゆる生産年齢人口の減少という前提がありまして、藤沢市では、今、地域包括ケアシステムという福祉的なネットワークを作ろうとしています。その中で特に重要視されているのが、アウトリーチという考え方ではあるんですけれども、その部分というのは例えば福祉的な視点によるアウトリーチだけにとどまっていいのか、というところで市民活動におけるアウトリーチを考えたいな、ということで、今回基本指針の一つとして位置付けた次第でございます。

（中島委員長）まちづくりでもアウトリーチって最近使いますよね。でも、さっきと繰り返しになりますが、提供する側と受け取る側っていうのが分かれているっていう印象が強いんですよね。

（木村委員）私も同じ受け止めをしておりまして、もしあの図で言うと、アウトリーチというのは、⑥の交付金をあげる。本来アウトリーチはそういう意味ではないと思うんですけれど、地域に入っているというか、矢印の方向としてそう見えてしまうということにかかわるんですけれども、この計画の全体の主体は誰なのか、主語は誰なのかっていうところも、この言葉の使い方にかかわってくるのかな、という風に、受け止めております。何を、誰が提供するのかという視点も整理できたらと思います。

（中島委員長）文言の整理はまた後で。文章の整理は必要だと思うのですが、主語がわからない文章が多いんですよね。それはちょっと整理する必要があると思います。市民活動推進計画で謳われている、誰がというのは、よくあるパターンは、行政の責務なのか市民の責務

なのか、主体をはじめから分けてしまって、それぞれの視点でこういうことを取り組む、として、推進委員会は策定する側としては市民活動推進センターを含めて、どちらも支援をしたりつないだりするパターンもあるかもしれませんね。市民の視点では、市民一人一人の自覚を促すというのを市民活動推進計画の主体とすると主語は市民になりますね。

（宮原参事）今の木村委員の発言のところで、⑥も確かにそうなんですが、アウトリーチというのは本来、②の新たな担い手にアプローチをしていくという意味合いで置きたい、と思ってはいます。あとは、主語という話が出ましたが、行政計画なので、「行政は」という考え方もあり、という形ではいたんですけれども、やっぱり「私たちは」というのがいいかな、とちょっと思っています。

（中島委員長）「私たち」というのは藤沢市民を含めて・・・

（宮原参事）全部ですね。

（中島委員長）では、その点も含めて、アウトリーチという言葉と、ネットワークという言葉と。指針の視点が、計画によって誰かが何かをする、という指針なのか、こういう状態になる、例えば、ネットワークって両義的だと思うのですが、ネットワークを作ることを支援するという視点もあるし、でもネットワークって勝手にできるものもあるし、市民同士、市民活動団体がネットワークを作る、そういう状態のことを目指す。施策のほうは、主語がもうちょっと明確になって、誰がこういうことをする、なになにをする、っていう支援的なことがあるかもしれませんが、もしかすると、指針とかこういう状態を目指すんだ、という言葉は、主語が市民とか行政を含めた、もうちょっと両義的なものかもしれませんね。アウトリーチというと、どうしても市民がアウトリーチするってなかなか難しいですよね。

（山岡副委員長）カタカナ語はいろいろな解釈があるので、例えば、ボトムアップというのも組織の中で下から上に意見をあげていく、というのもありますし、物事を積み重ねていく、という意味もあると思うんですよね。アウトリーチも同じで、福祉の世界と、いや行政のほうで考えているのとはちょっと違っているとか。聞く人によって解釈が違うような言葉を使うと、たぶんよくない。Vers.2 では、確か人材育成と協働と仕組みづくりの３つの日本語だったと思うんです。私は勝手に人材育成がボトムアップに当たるのかな、とか協働はきっとネットワークに置き換えられたんだろうな、じゃあ、仕組みづくりはアウトリーチになったのか、とかいろいろ考えながら読んでいたんですが、でもなんかそうでもなさそうだな、と思いながら読んでいて、やっぱり、誤解を招くような言葉を使うのはちょっと。特に、中島委員長がおっしゃっていたように、アウトリーチに関しては、そういう可能性が高いのであれば、ふさわしくないのではないのかなと思ったんですが。むしろ、例えば市民活動の世界で言えば、協働という言葉であれば、誤解を招くこともないでしょうし。

（中島委員長）基本指針１は「市民活動の裾野を拡げる人材や活動の創出」。前回のですね。２つ目が、「自立や持続を考える市民活動に向けての仕組みづくり」、３つ目が「市民活動のつながりを作り、協働を推進する」。一番必要なのは人材。２つ目は市民活動そのものです。

今回の市民活動推進計画 Vers.3 でも、条例の第３条がありますが、市民活動のそのものに価値があるから、それを支援することに、成果を求めたりとか、功利的なものを排除しても、市民活動が活発なこと自体に価値があるんだっていう言い方をしていると思うんですね。市民活動推進条例では。ですから、その部分の、市民活動そのものがきちんと活動されている。協働は、行政からいう協働というと目的もありますし、市民が勝手に、市民同士が協働するという意味の協働もあるので、両面的な協働ですよね。そういう意味では、バランスが良いとは思います。では、これは、とりあえず後で議論をするということで置いておいて、先ほど参事のほうからあった、最終的なゴールはビジョンやキーワードを、推進ビジョンを明確にするということですけれど、市民活動という言葉の市民協働、多義的な意味での協働という言葉は入ってくるとは思いますが、何かこの図に足したいところとか、何かありますか。あるべき姿のほうが良いのかな。でないと、この図はそれを実現するための手段ですしね。あるべき姿を先にまとめましょう。こういう視点があったほうがいいとか、皆さんからいただいているキーワードでこれはすごくいいとか、何かありますか。これが最終的な目標だとすると、それに向かっていろいろ達成するための手段的なものとして施策ができていくという形だと思うんですが、まずは、ビジョンとかキーワードを先にやりましょう。非常にポジティブなキーワードもありますしね。

（濱野補佐）本日お配りした資料の中で「ビジョン・キーワード」ということで、前回の分科会で出た意見と、そのあとに事務局のほうに何か意見ありましたらください、ということでいただいた意見が反映されております。

（中島委員長）こういう視点が重要なんじゃないか、ということがあったらおっしゃってください。この中に挙げてあるものでも構いません。自分が書いたものではなくて、ほかの方が書いたものでいいなと思うものでも全然問題ないです。

（宮原参事）ビジョンをご検討いただくにあたり、そのビジョンてなんだろうな、というところをまず明確にする必要があると思いまして、先ほど主語は「私たち」と申し上げたところではございますが、私たちが共有すべき目標とか、共有すべき未来とか、それをブラさないで、推進ビジョンというのをご検討いただければ、と思うのですが。

（中島委員長）推進計画自体が、今回は長いですね。7 年で。途中にオリンピック・パラリンピックもありますし、２０２５年までですね。２０２５年を見据えて、どのようなまちになっているかということを市民活動っていう視点でとらえたキーワードが必要ですね。

（金子委員）ビジョン・キーワードの紙を見ていて思ったんですが、ここでは縁（えん）ってありますが、議事録でもどなたかおっしゃっていたんですが、一本テーマをもって、柱ってなんだろうなって、これを見ながら思ったのが、この縁ってイコールの円、まどかの円につながるんじゃないかと。今後の市民活動というのが、さっきの図を見ていて思ったのが、横の矢印がないですよね。中心があって、ただ、それを横でつなげると歯車になってそれが円になって回るんですよね。全部どこかひとつがハブになって通すのではなくて、横が連携

すればよりスムーズに活動もできやすいですし、どなたかもまちづくりって人づくりだよね、って話もあったり、人づくり、ってなんで人づくりをするのかと言ったら、やっぱり良いまちづくりだったり、自分のまちを良くしよう、それは結果的に自分も良くしたい、自分も良くなりたい、という色々な思いがあって、市民活動を推進したほうがいいんじゃないか、という思いがあってこの市民活動推進委員会があるんだろうし、そこを推進していきたいという思いもあるんだろうし、とりとめのない意見になってしまって申し訳ないですけど。そういった意味で、循環というか、それを平たく言うと円なのかな、って。情けは人のためならず、って言いますし、結局は自分に戻ってくるんだよね、というのはこういった活動の中で、柱になっていくといいんじゃないのかな、と読んでみて思いました。

（中島委員長）中心のことはどうしても考えがちですけれど、それだけじゃなくて、それぞれの主体というかがきちんとつながっていて、そういうような社会・ビジョンを目指す。私が金子委員の話を勝手に解釈していますが、自立した個人があって、その人たちがお互いに助け合って、自分が必要な時はその人たちが自分をサポートしてくれるとか、そういう互酬みたいな、そういうイメージをできればいい。今回の Vers.3 では、社会関係資本、ソーシャルキャピタルって言葉がありますが、前からありましたが、ソーシャルキャピタルの中心的な概念の一つは互酬性、です。互恵性とか互酬性。なかなか日本ではなじみがないけれど、ここでは、自治力としていますね。

（手塚委員）配布されたビジョン、2030 年のビジョンの丸３つあるけれど、このビジョンを見ると、個性、感動、誇り。推進ビジョンの大きなまるでくくられているもの。

（濱野補佐）これはまた別の資料で、これは他市の資料でこの後ろの図で使うものです。

（手塚委員）ようするに、ここに書いてあるように、ビジョンというと結局ここに書いてあるような話になってしまうけれど、今藤沢市がおかれているやばい状況を踏まえたうえで、こういうことが出てくるのか、ということなんですよ。この前８月１８日の時に、市民自治推進課の課長さんが、危機をチャンスにとらえろ、とデータをもとに話をしてくれましたよね。そういう時期において、最終的には、いわゆる一般的なビジョンっていうと、ここに書いてあるように典型的な感動とか、個性とかなりがちなんだけれど、それは、一般的な話であって、今藤沢がおかれている状況から考えると、もうちょっとシビアなビジョンがないとこれから何年か推進委員会、市民活動をやっていくうえで、もうちょっとインパクトのある、2040 年に向けてのインパクトのあるビジョンというのを一本入れておかないと、ただ、楽しいというところに陥ってしまうんじゃないか。

（中島委員長）例えば、何かキーワードとして。

（手塚委員）キーワードとすれば、今、藤沢市の産業は全然落ち込んでいるわけですよ。それから、観光業界一つ取ったって、うまくいっていない。年寄りがどんどん増えちゃって。それから、この前話が合ったように、老人・子ども会が減っていく、自治会が減っていく。そういう状況の中で、４０年に向かってビジョンをひとつかふたつ入れておかないと。

（中島委員長）こういう状況に市民活動がどうこたえるか、もしくはこういう状況で市民生活がなされなければいけない時に市民活動の役割がどうあるべきか、みたいなイメージですか。同じ言葉になるかもしれないけれど、ビジョンとして、そのプロセスをちゃんと共有しておいたほうがいい、ということですね。

（手塚委員）今、国を挙げて、100 歳、現役 100 歳とかいうキーワードがありますよね。将来現役 100 歳という言葉が叫ばれている、そういう状況を考えたうえで、市民の中にそういうテーマを活動の中に持ち込んで来ようという人たちが今後増えてくると思う。あれだけ騒いでいるんだから。だから、そういったようなことを含めたような大まかなそれをまとめるようなビジョンが一つなにかほしい。今、掛け声だけですよね。生涯現役 100 歳。これから具体的にどうしようかっていう小さな小さな細かく分かれたテーマを取り上げて行くのが、市民団体であり、NPO ですよね。ほんの小さなひとかけらをあちこちの市民団体が追及していく。そうするとそれを集めたときに一つの方針みたいなものが出てくるんじゃないか。それをまとめたようなキーワードみたいなものが一つあったらいい。

（中島委員長）さっき、参事から地域ケアシステムの話がありましたが、地域ケアシステムはもちろん専門家のネットワークがありますけれど、市民の側の主体としては、元気な人はサービスの提供する側、支える側にまわってね、というメッセージが強いんですよね。

（宮原参事）今、産業とか観光とか経済活動の衰退、あるいは自治会・町内会、老人クラブ、子ども会の衰退、というのは確かに数字的には右肩下がりにすべてなっています。人生 100 歳時代、生涯現役というのは、いわゆる地域共生社会という総務省の考え方の下で動いていますので、当然、人口構造の変化というものは前提としてなければならない、ということで「はじめに」というところで書こうかな、という思いはあります。地域福祉計画も人生 100 歳時代ということで、決して地域福祉計画の中でも高齢化を悪いというとらえ方をしていないんですよね。もう少し言うと、高齢化が悪いのではなくて、高齢者が老害になってしまうのが悪い、という言い方をしているマスコミもあります。そういったところを市民活動といったところで乗り越えていくという形になるので、前々回山岡委員がおっしゃっていたように、危機を前向きにとらえていくという中での表現のほうがいいかな、と考えました。

（中島委員長）たぶん、ビジョン自体は明るい、こういったことを踏まえて、その明るいだけでは問題ではないかというのが手塚委員の問題提起ですよね。状況を踏まえて、その明るさの中に、きちんと施策に結びつけられるような現状把握をすべきである、と理解しました。

（村上委員）地域福祉計画の話が出たのですが、たまたま計画書を持っていて、地域福祉計画のビジョンとしては、「一人ひとりが主役　共に支えあい　安心して暮らせるまち　ふじさわ」というビジョンになっているんですね。支え合い、共生型の社会を作って安心して暮らせるまちを作っていこうというのが地域福祉計画のビジョンになっています。ビジョンは、市民の方が見てわかりやすいものにしていくという考え方で地域福祉計画も作っていて、どちらかというと、市民活動推進計画というのはこれを包括するような広い意味での市民活動

をどうしていくか、ということをビジョンとして示すべきなのかな、と思っていますが、そういった中では、まちをみんなでどうしていこうか、という目標をビジョンの中に入れていくというのも一つ。「まち」という言葉を使うかどうかというのもあると思うのですが。

（中島委員長）みんながまちをどうしていくか。

（村上委員）どうしていかないといけないか、になるのかもしれないですね。手塚委員の意見ですと、どういうまちを未来につないでいくのかという。

（中島委員長）こういうまちにしよう、というのは、大体考えると似たようなものになってしまうと。それを包含するような形で、結局みんながまちをどうしていかなければならないのか、というのをみんなで作っていけるような、そういう環境を作るビジョン。まちがどうあるべきか、というのを決めると大体みんなこんな風になってしまう。「一人ひとりが主役　共に支えあい　安心して暮らせるまち　ふじさわ」これが福祉計画のビジョン。もしかしたら、こういう風になってしまうかもしれないけれど、こういうのを含めて、みんなが、市民の方がまちをどうしていかなければならないかというのを一緒に考えるようなことも含めて、それをビジョンしていく、ということですね。もっとプロセスとか、動的なものを促すようなものをビジョンにする。

（西貝委員）条例のところは、今のところ、藤沢は市民活動が活発で、これまで色々な市民や市民活動団体が協力し合って、市民の塊が市民活動団体ですから。創造性豊かな活力ある地域社会を築いてきたと。こうした市民の力はこれからの藤沢のまちづくりにとってますます必要とされていて、さらに推進することが求められていて、そのためには、市民一人一人が自分自身に何ができるのかを問い直し、新たな参加・創造の主体へと変化していくことが期待される、と書いてあるんですよね。これって、総合計画ではないので、まちの全体のことを言う必要は全然なくて、あくまで、市民活動の推進のための考え方のビジョン、キーワードとしてとらえればいいと思うんですけれど、産業、経済、何とかってあると思うんですが、それより、ビジョン・キーワードでとてもいいな、と思っているのは、「一人一人が」ってあるんですよね。「みんなが」ではなくて。日本人ってすぐに「みんな」という風に言うんですけれど、みんなじゃないんですよね、市民活動って一人一人ですから。その一人が、自己実現をしていく中で、いかに一人一人が幸せになって、それが市民活動につながっていって、それが街の活性化につながればいいし、直接つながらなくても。ただ、この推進条例は、市民活動ですから、単純に一人一人がいいってわけでもないと思うんですけれど。だけど、もとは一人一人ですので、その辺が、観光・経済まで考えていく必要はないと私は思います。

（中島委員長）今、西貝委員がおっしゃったのは、推進条例の前文に当たるところですね。

（西貝委員）それは、行政を含めた、議会とか全体でやればいいことで、市民がそれを担うことはないと思います。そしたらそれは、戦中、戦前みたいな感じになってしまいますから。

（中島委員長）さっき、最初の Vers.2 の指針は、一番最初が市民一人ひとりの活動にきっとフォーカスを当てていると思うんですね。２つ目は今西貝さんが指摘してくれたように、市

民が集まればそれが市民活動団体といって、市民が集まった時にどうしたの、それをどう進めようか、３つ目は、もうちょっと何か課題を解決する、一人ではできないので、協働でどうするか、そういう 3 段構えで、でも一番最初が一番重要ですよ、ということでとらえていいですよね。その市民活動という物の価値をある意味手放しで尊重していて、それが藤沢市の伝統であると思いますので、そこの点をさらに見つめなおして、こういう時代だからこそ、市民一人一人が活躍できるようなまちというのを成り立たせるのが重要なんです、と。これが制定されたのが平成１３年、１７年前ですけれど、そのときより、もっと重要になっているという認識でよろしいですね。

（手塚委員）NPO 法人を作るときに、設立するために、まず定款を作らなければいけないっていって、当時は神奈川県に持参したんですよ。今は藤沢市に。その時に、当時１０年位前だけど、NPO 関係をやっている役人が言うには、一番大事なのはビジョンだって。最初にビジョンを持ってこい、って。そのビジョンがなかなか受け入れられなかった。そんなのがビジョンなのかって。当時は非常に厳しく指導されたんですよ。ということは、結局ビジョンというのは、団体を作る以上、団体が活動する以上、その活動の具体的な目的見たなものがきっちりわかっていなければ、その団体は成立しない、ということだって、言われたんだよ、徹底的に。それが今でもずっと残っていて、それを今度藤沢市の市民活動っていう一つの活動をするにあたって、そのビジョンを作ろうといったときに、そのビジョンがあいまいなものであったら、その推進の全体のビジョンがあいまいだったら、あいまいなものをもとにして、NPO だったり、市民活動の人たちがビジョンを作る。ある程度、あいまいなところがあっても、一本現状の情勢を踏まえたビジョンが入っていないと、改めて推進計画を作る意味がないんじゃないか。新しく推進計画を作る意味というのは、世の中の状況が刻々と変わっていく中で、ちょうど今年が変わっていく節目で、いろいろなことが叫ばれている。そういう叫ばれていることをある程度前提にしたうえでの市民活動の推進ビジョンを作るべきだ、と言ったんですよ。別に産業・観光がどう、と言ったわけではない。

（中島委員長）説明中にそれを入れていただいて、言葉は決めなければいけないので、ビジョンとして。その言葉が出てきたってことを我々できちんと共有して、そのプロセスというのを。とても重要なことですね。一人一人が、というのは、金子委員が最初におっしゃっていた、一人一人とか、個の主体にフォーカスしようということですよね。西貝委員が指摘してくださった、一人一人が、ただそれだけでなく、つながる、ということ。それを施策の中に入れるかどうかですけれど。アウトリーチという言葉が出てきた背景には、勝手な私の想像ですが、ひとりひとりが主役、と言っても、みんながヨーイドンでスタートラインに立てるわけではありませんので、なかなかスタートラインに立てない人をきちんと支援して、社会の中でちゃんと位置づけられるように、その人が役割を果たせるようにしましょう、というメッセージなのかな、とは思います。ただ、それは、指針の下の施策の部分かなという気はします。スタートに立っている人がどうするかというのは大前提であって、その中にアウ

トリーチというのは、通常の方法では参加できなかったり、メッセージが届かなかった人たちに対して、どうやって積極的に働きかけようか、というのがあると思いますので、通常の状態というのはまず一つ押さえておいて、そこに達しない人に支援しましょう、という気がします。

（手塚委員）この計画が成立したとすると、今の NPO 法人や団体に配られる。そうすると、藤沢市が作ってくれた推進計画を見て、ビジョンをまず見る。そうすると、ビジョンの中に非常に目新しいことが入っている。かつての計画にはなかったような非常に目新しいビジョンが入っているとすると、総会を開いて、推進計画の中のビジョンが新たに提示された、と。我々としても、定款の中のビジョンを変えるか変えないか、という議論が起こってこないと困るよね。

（中島委員長）いや、ないと思いますよ、それは。

（手塚委員）だけど、起きなかったら、何も変わらなかったら、何も作る必要はない。

（中島委員長）市民活動推進計画と個別の団体とは別物ですから。それを制約しては元も子もない。

（手塚委員）制約じゃなくて、そういう市としての、市の推進計画のビジョンが打ち出されたら、一応団体はそういうことに関心を持っている人たちは、それを見て、自分たちのビジョンはどうだろう、ということを見直しするところが出てくるんじゃないの、常識的に。

（中島委員長）そういう団体が多いといいですけれど。

（手塚委員）そういう団体が出てこなかったら困るでしょ。

（中島委員長）市民活動団体は別に７年サイクルで活動しているわけではないので。

（手塚委員）新しくビジョンを打ち出すんだから、それに対して、動かなきゃ困るじゃない、藤沢市民が。

（中島委員長）手塚委員のような市民活動団体がすべてだったらすごいなぁ、と思いますが。

（手塚委員）でも、ビジョンが打ち出されたら、そのビジョンに対して、何かやってやろうじゃないか、という団体が出てこなかったら困るでしょ。

（金子委員）今の意見で言うと、別に困らないと思います。なんでかというと、藤沢市が例えば A というビジョンがあって、新しく A'か B になるかわからないですけれど、新しいビジョンが出たときに、そこに一緒にやろうか、という、もちろん思う団体もいるかもしれないし、ただ、思わない団体がいるほうが本来あるべき姿だと思うんですね。なぜかというと、もともとそのビジョンを考えた団体は、そのビジョンが正しいと思って発足したわけですよ。そこで、藤沢市がこうやったから、藤沢市に倣え、という団体であれば、逆に言うとその団体は役目が終わったんだから、解散しましょうよ、とか極端に言ってしまうと。そういう動きになればそれはそれでいいかもしれないですけれど、そこまでその団体の中身をどうこうして考える、というところまで、市民活動推進委員会でビジョンとして出す必要はないと思います。市がやったからうちもこうしようっていう団体はそもそもいらないんです。

（手塚委員）そういうことを言ってるんじゃなくて、新しいビジョンを出したならば、そのビジョンを見ていいことだなぁ、と思ったらそのビジョンを推進するために自分の団体を教育して、こういうビジョンを作ろうかな、って考えるのが普通じゃないかなって。それが新しく出てくるビジョンが、前の計画とあまり変わらないものなら、新たにビジョンを作る必要はないんじゃないかって。新しくビジョンを作ろうって言っているんだから、前とはちょっとは違ったビジョンが出てくることを期待しているんだよ。

（山岡副委員長）ちょっと今の議論から外れるんですが、西貝委員の意見とか、今までずっと出てきた意見で、一つキーワードは「つながる」ということじゃないかなって思ったんです。結局一人一人の活動、思いから出てくる行動であるっていうのがとても大事なんですけれど、それが一人一人の活動で終わっているのであれば、たぶん個人の中にしか何も生み出さなんですよね。それがつながっていくことで、ひょっとするとみんなにとっていいことになるかもしれないし、地域にとっていいことなのかもしれないと思うんですよね。それが、先ほど金子委員から縁とか円っていう言葉で表現されていましたし、そういう意味では、個人が市民活動団体とか市民活動につながるということになりますし、市民活動同士がつながるということもありますし、あるいは市民活動がほかのセクターとつながるとこともありますし、あとここに出ているキーワード、未来につながる。そういうつながりを生み出し、育んでいくことでその地域の未来がより良いものになっていく、明日につながる、みたいな「つながる」もあるかな、と。私の中で勝手にもしかしたら「つながる」って大事なキーワードじゃないかな、と思ったので意見を述べました。「つながる」とか「つなげる」とかが市民活動では大事なんじゃないかな、って。

（中島委員長）そこからつながって、最終的な社会の在り方とか市民活動の在り方ができるようにどういう施策をとっていくか、という感じですね。

（山岡副委員長）だた、さっきの基本指針につながると思うんですね。人材育成のところは個人を市民活動につなげるですし、協働はそもそもつなげるですし、仕組みづくりもたぶんつなげるための仕組み、つながるための仕組みを作るってことで、全部入ってくるような気がするんですけれど。

（仲田委員）「つながる」とか「ひとりひとり」に大変共感しておりまして、「つながる」という言葉の大切さをすごくかみしめながら、何かほしいな、と思って、私がつい意識がいってしまうのは、まだまだ市民活動とか活動のスタートラインに立っていない市民一人一人の暮らしを営んでいる、一人一人なんですよね。その一人一人の暮らしの目線でもって、見えてきたアイデアであったり、こうあったらいいなというところを形にするために、つながるんだな、と思って、単につながるっていうと、普通に暮らしている、まだ市民活動に一歩踏み出せない私たちが、つながるってどうやってつながるかわからないけれど、何を持ち込めてつながれるかという、そのつながった中に流れる情報だったり、何だろうって言ったときに、その市民一人一人が、もしくは団体でもいいけれど、その暮らしの中から見えてきたアイデア、楽しむアイ

デアでもいいし、利他的な何かができるな、というアイデアでもいいし、何か形にするためのつながりなのかな、ということを今ちょっと思って、ビジョンを作るときに、自分が当事者意識になれる、一人一人のアイデアだったり、暮らし目線の何かというのを盛り込んでもらったりすると、一市民が一歩踏み出す動機づけになったりするかな、と思いました。あともう一つは、市民が強いられるものではないと思うんですね、市民活動って。だから、やりたくない人はやらない選択肢も十分あってよいと思うし、何か押しつけがましかったり、政策とかそういうものとはまた違うので、そのあたりが自由度というか、あまり押し付けられた感がないものがいいなって気がしたりしています。何とかのため、とか、目的意識を前に出されると一市民として抵抗を感じてしまう。

（中島委員長）ちょっとイギリスの話で恐縮なんですが、市民活動をやっている市民の権利として、right to be left alone。ほっとかれる権利。勝手にやっているんだから、勝手にしておいてくれよって。

（阿部委員）この間から、議論を聞いていて感動しているのは、何かを目的、政策に貢献することを目的にするのが活動ではなくて、たまたまやっていたことが、市民の皆さんの役に立つ、ということがいいんですよってことで、目的のために集まるんじゃなくて、別のことをやっていたら、それがたまたま、まちづくりに役立ったという、結果そうなったというのが一番いい状態という、それを議論なされているという、西貝さんも仲田さんもそうおっしゃったその辺なんで、それはそのものがいいビジョンだと思うんです。だから、こういう社会が、少子化になっていますから、我々が何とかしなければいけない、という目的のために集まるのではなくて、たまたま集まりましょう、活動したことが市民の一部役に立つという、その姿勢ことが書くビジョンかな、と思っております。具体的に言うと、「楽しみながら参加する、縁（えん）の輪広がる」というのが一番最後にありましたけれど、まさに楽しんで集まったのがつながっていく、ということがいいんじゃないかと思っております。

（西貝委員）僕は個人個人ってよく言っているんですが、それが結果的に個人で活動していたものが、いろいろな形でつながっていったり、それが広がりを持っても、あくまでそれは個人の、西貝であれば西貝の自己実現だと思うんですよね。広がりはとても大切で、僕はそれをすごく大切だと思っているんですけれど、その中に一番中心となっているのは、団体が、というより、自分が一生を通して楽しく生活して、「ああ、いい生涯だった」と言って死ねるのがいいんだと思うんですよ。やっぱりそれはあくまでも自己実現であって、団体のための活動ではないので。単純に言うと、個人であっても団体であっても、自己実現のため、ってことですね。それがつながっていけば、もっと大きいものになっていきますよね。幅が広がっていくと。それはすごく大切だと思うんです。

（坂井委員）ビジョンを具体的に書こうとすればするほど、いろいろと議論が行き詰まる感じがするんですよね。この推進計画のそもそもの目的というのは、市民活動をもっと盛んにしていきましょう、という話でシンプルに考えているんですよね。ビジョン・キーワードでいろい

ろとご提案いただいているんですが、その前に、市民活動の息づくまち、っていうのを１個据えてですね、それでそのためにどうするのか、ちょっと具体的な説明を加えて。例えば、いろいろなキーワードがあるんですけれど、つながる、というと誰かとつながんなきゃいけないのか、と思う人も出てくるかもしれないので、「一人一人が」とか「自己実現」とかおっしゃったので、要するに「一人一人がそれぞれ輝く」っていうのでいいのかな、と思いまして、例えば、「誰もが個性の輝きをはなつ成熟社会をめざす」みたいな、そんなようなことでもいいのかな、と思いました。市民活動の息づくまち。それが特別なものではなくて、普通にそこら中にあるような、そういうイメージ。そのための施策、施策レベルでいろいろと落としていくんじゃないかな、と。

（中島委員長）これは、さっき仲田委員がおっしゃっていた、市民が楽しくとか、市民活動をしていない人も含めて、一番のターゲットは今やっていない方ですよね。それを含めて市民の方がいろいろな形を含めて市民活動をしている。

（手塚委員）今、ここに書かれていることについては、ものすごく賛成なんですけれど、一応前提が、今までの推進計画の反省と検証をもとにして、新たな推進計画を作るわけだから、今まであったビジョンらしきものと、今その計画で行われていてた状況で、うまくいっていたのか、いっていなかったのか、市民活動そのものが、子ども会とかなんだかんだ全部含めてみたときに、やっぱり下降傾向に来ているんじゃないか、市民の集まりの傾向が。その下降傾向に来ているのをよしとするのではなくて、もうちょっと横ばい、市民が活性化して行くように、町内会も老人会も入る人がたくさんいて、みんな楽しくやっていけるような、そういう末端の市民活動が向上していくように、新しいビジョンを作らなければいけない、というのが一つあるんだけれども、それだけでいいのか。今藤沢市が置かれている非常に危機な状況をみて、ある団体はそれをチャンスとして違うところに発展しようと考えているだろうし、藤沢市は藤沢市として、この危機をなんかの形で乗り越えようとしているんだから、少なくとも市民活動推進計画を作るにあたっては、楽しいとかつながりとか入れるのはもちろん大賛成なんだけれど、そのほかに一つそういう背景をもとにした一つのビジョンがあっていいんじゃないか。さっき、丸が３つ書いてあるのを見たんだけれど、これはほかの例だっていうけれど、この３つじゃしょうがない。せっかく新しい推進計画を作ろうって言っているんだから。そういうのがすべてこれに含まれているっていうことならばいいけれど、そうすると前文を書くときにものすごく難しくなる。この今ある「はじめに」というところに、目的っていうのがかなりやわらかだけどある。だから、あまり何かをやらなきゃいけないとか、なんとか押しつけがましいのは、市民活動に対してプレッシャーになるんじゃないかと言っているんだけれども、はじめにっていうところとか、最初に書く文章はそういうことにならざるを得ないんじゃないですか。そうすると、ここには、目的とか書いてあるけれど、今ここで議論されていることを踏まえて、まず、はじめに、って書くようにすると、「一人一人が」「個人個人が」ということを強調してこの文章が成立しなければいけないんだよ。それで、成立するかどうか。そうすると、活動っていう

ことは一人一人がもちろん活動するんだけれど、数人が集まってやらなければ、成果っていうのは出てこない。みんなが点でバラバラにやっているんだったら、団体なんか作る必要はない、極端に言えば。だけど、そうではなくて、少なくとも、いろいろな市民活動をする、同じような考え方を持っている人が集まってやるんだから、そこにはやっぱり、団体としての目標・ビジョンがある。

（坂井委員）今おっしゃったことはごもっともだと思います。その問題意識っていうのは、実は今私が申し上げた中の「息づくまち」というところに入っています。いろいろな既存のものがだんだん下火になっていく、というのを問題意識としてとらえているという気持ちも入っているんですよね。それから、後段のほうの、人口が減っていくとか、高齢者が増えていく、という部分が、実は成熟社会と簡単に言いましたが、そこに気持ちが入っています。ですから、そういうつもりであれを申し上げているので、そういう社会であっても、みんなが輝いていけるような社会を目指していきましょうね、という気持ちだっていうことをちょっと申し上げておきたい。

（西貝委員）今までの既存のものっていうのは、昭和の時代から平成に入ってずっと行われていた団体ですけれど、なかなかやはり、新陳代謝が難しいんですよね。ですから、新しくどんどん新陳代謝をすれば、その時代時代に合ったものに変化していくと思うんですけれど、なかなか、一つ作った団体っていうのは、その後ずっと大きく成長していくことは難しい時代なんだと思うんです。それは、もちろん PTA とか子ども会とかみんなそうだと思うんですよね。でも、それがなくなって、すごく困っているのかというと別に困っていないと思うんですよね。困っているところもあると思うけど。ですから、別の形に変わってきているんだと思うんですよ。そこのところをずっと見据えたビジョンもそうですけれど、基本方針みたいなもので、こういうことによって、今そのビジョンってすごくいいと思って、それを実際的にやるのにこれがどういうような方法をとっていくと、新しい変化にこれから先、対応できるのかなぁ、っていうような期待が持てるような計画があっていいのかな。それが先ほど手塚さんが言っていたみたいな、この計画が変わってきたから、こういう方法もあるんだね、ということが入ってくると、個々の団体がビジョンを変えたりということはないと思うんですけれど、個々の団体がこれから先やっていくのに、今までちょっと停滞してたんだけれど、こういう方法が、例えばアウトリーチがいいかどうかは別として、アウトリーチの方法をとった、こういう方法をとったらもっと活発になるかもしれない、という形のようなものがこの計画の中に、ビジョンとか基本方針の中に入っているといいのかな、って思うんですよね。

（阿部委員）手塚委員が文章がすごく難しくなると思う、っておっしゃっていたんですけれど、そういう意味で見ておりまして、この書かれた文章の２つの文章を削ってしまったら、それだけで、十分じゃないかな、と思っております。　というのは「「公共」という暮らしの場において」、ということが入っているんですが、それをとってしまい「多様化する地域課題や～」としてしまうこと（１ページ目）、それからもう一つは「少子高齢化の進展や人口減少社会の

到来～」そうではなくて、ただ単に２行目の「地域社会におけるコミュニティの希薄化～」（２ページ）というもので、みんながもっと活動しましょう、ということを言っているんであって、そこを残せば、少子高齢化だから市民活動をやりましょう、とかそこが目的じゃないよ、とってしまえば全部この文章で通じるんだなぁ、と思います。

（手塚委員）そういうことです。でも、入っている以上、私が言ったことを議論しておかないと。外してしまえば、もっとおおらかな、ということになる。そうすると、ここに書いてある、「作りたい未来」「ありたい未来」という非常にいいキーワードがここに入ってくるんですよ。

（中島委員長）今、手塚委員が言われていることは、施策の中に必ず入れなければいけないところですね。個人の活動がベースにありますけれど、何らかの形でそれを実践しようとしたら、自ずと組織化するのは当たり前の話で、実際はそこの組織化のところが重要だと認識されていると思うんですけれど、ビジョンというか、その下の施策のところで、間違いなく打ち出す必要があると思います。

（手塚委員）ビジョンだから、ある程度ふわふわしたものでよいんじゃないかと思う。この後ろに出てくる基本計画というか、施策のところにもうちょっと具体的なものが入ってくればいいんであって、やっぱり一人一人が幸せになるとか、そういうようなキーワードが入っていなければいけないんだけれど、それをうまくまとめるのと、最初の「はじめに」が矛盾しないようにしておかないと、そこをどういう風に矛盾しないようにまとめるか、っていうことですよ。

（中島委員長）では、時間も迫っていますので、まずはビジョンをなんとなく方向性、文言を決めていく・・・、あり方とは違いますが、ビジョンってこういうものでビジョンにしようっていうのと、そこから基本方針を決めていって、今日はそこまで決めればいいのかな。ビジョンは今、坂井委員がおっしゃってくださった「誰もが個性の輝きをはなつ成熟社会」、あとは、さっき仲田委員がおっしゃってくださった、「一人一人が輝く藤沢」とか、「つながる」とか。

（仲田委員）これがいいとは思わないんですが、今ぱっとひらめいたんですが、今の「誰もが個性の輝きをはなつ成熟社会」というのにとっても共感していて、いいな、と思っています。これをバーッて上にあげて、さっき３つの丸が、という話がありましたけれど、３つくらいそのブレイクダウンを、例えば、市民活動のライフサイクルみたいにとらえて、ひとりひとりがまずアイデアを出すけれど、いつか例えば組織化するとか、例えば、枠組みで区切って、サブビジョンみたいな形で、それが市民活動のライフサイクル的なものなのか、それともさっきの協働とかつながるとかなのか、分からないですけれど、そういう形で少し皆さんの意見を総括するような形でまとめることもできるのかな、と思ったんですが。

（中島委員長）キーワードみたいなものですね。

（仲田委員）個性の輝きをはなつ成熟社会、ってとてもいいな、って思っています。それを具体的にどういうイメージか、例えば NPO の方とか、全然まだ市民活動をやっていない方とか、いろいろお話が出たので、そのあたりで区切ってもいいのかな、と思ったりしたんですけれど。

（中島委員長）この３つに今まで議論してきたキーワードみたいなものを短い形で入れていく

と。
（仲田委員）それは施策なのかな。
（中島委員長）でも、それからさらに施策があってもいいんじゃないかな。
（木村委員）今、仲田委員がおっしゃったみたいな形で最初提案いただいた「成熟社会」がまずビジョンとしてあって、それに向けて、ということだと思うんですけれど、具体的に指針、さっきアウトリーチとか外来語が３つあった、それは、副委員長がおっしゃっていたように、前のバージョンだと人材とか、自立とか協働等全部連動しているんじゃないかな、と私もとらえましたので、例えば、人材育成の部分っていうのが、何人かの方がおっしゃっているような、まだ市民活動に踏み出せていない方たちが、自分の楽しいとかやってみたいというものを形にすることで市民活動の世界に入っていけるというか、最初のアーリーステージみたいなところですよね。さっきアウトリーチという言葉が使われていましたが、それはやめたほうがいいと思います。ボトムアップというか、最初のエントリーレベルというと変かもしれませんが、本当に最初のとっかかりみたいな感じで人を育てていくことにつながっていく、みたいなことですかね。次が、自立、組織化して動くっていうことが絶対的に大切になってくる、ということは私も同感です。やっぱり既存の組織を含めた持続可能な仕組みづくりみたいなところで、自立、というのが一本入ってくるんじゃないかな、と。最後が協働というのが出ていましたが、最初事務局が大きな相関図を出してくれましたが、そこをどう有機的につなげていくのかということで、より高次な次元の政策とも連動してくるのかな、ととらえると、ステージごとでもあり、それぞれのステージの課題にもある程度つながるのかな、と感じて頭の整理ができつつあるのですが。その最初の「ひとづくり」みたいなところで、個人の想いとか、個人から発意するというところはそこを謳うことによって担保できると思います。
（中島委員長）最初、金子委員が口火を切ってくださったことが、全部関わってくるということですね。
（西貝委員）たとえば、今の流れでいうと、その３つに個人とか団体とか地域社会とかそういうものがあると具体的につながっていく感じ。
（中島委員長）個人、団体、地域社会、っていう言葉はいいですね。発展形ではないですよね、違う立場で。市民活動を始めた人が、いずれ進化しなきゃいけないか、ということではなく。
（木村委員）そうですね。ステージはそれぞれということで。
（坂井委員）もし柔らかい言葉でその３段階を言うとすれば、最初のところは「一歩踏み出す」。例えばですが。次が「つながる」、３つ目が「共に歩む」とか「力を合わせる」とか、そういう感じ。
（手塚委員）今の意見に賛成なんですが、やっぱりうまくいっているところは現状維持で進めるビジョンが一つある、それからもう一つは現状の状況を判断して、それよりももうちょっといいようにしようとするビジョンが一つと、もう一つはそういうこともあるけれど、その時期、このチャンスをとらえて、もうちょっと大きなビジョンを掲げようじゃないか、というホッ

プ・ステップ・ジャンプというようなビジョンが必要じゃないかと思います。現状維持と、今あるものの改良。それから、そういうことを逸脱した革新的なビジョン。その三つが必要だと思います。

（中島委員長）どこかに包含的に入るといいですね。全部にかかる。個人もそうですし、団体も協働もそうですし。

（手塚委員）それをもっとうまい表現で、さっき言われたように柔らかい表現でなんかできればいい。後の具体的な、高齢者が増えてくるからこういう施策が必要だ、というのは後の６つか７つの具体的な施策に入ってくればいい。

（中島委員長）確かに、縦の糸と横の糸っぽいですね。すべてに言えますよね、改良、もうちょっと良くしようとかって。

（手塚委員）だから、つながるとかって大きな言葉になっているわけですよ。

（中島委員長）構成として、ビジョンという言葉があって、その下に基本指針に結び付けられるような、リンクするような柔らかい言葉があって、それをもってビジョンとする。後は基本指針と具体的な指針に基づいた施策、という感じですかね。

（山岡副委員長）さっき、坂井委員が、「市民活動が息づくまち」とおっしゃっていたのですが、「誰もが個性の輝きをはなつ成熟社会」もそれはそれでいいと思うんですが、個性の輝きをはなつフィールドは必ずしも市民活動のフィールドではない場合もありますよね。企業社会の中で個性をはなつ人もいるし、家庭生活の中ではなつ人もいるわけだから、「市民活動の息づくまち」というのがあって「誰もが個性の輝きをはなつ成熟社会」というセットがないと、市民活動推進ビジョンとして、いきなり「誰もが個性の輝きを」って言われても、「え、市民活動じゃないと個性の輝きを出せないの」みたいになってしまうので、その「市民活動の息づくまち」というのが最初にあったほうがいいんじゃないかな、と私は思いました。

（中島委員長）藤沢市の推進条例って、市民活動の価値を手放しで認めているところがあるんですよね。市民活動があることが社会の基本でいいことなんだ、それを推進しよう、理屈抜きで、という考え方です。市民活動とは何か、ということは置いておいてですね。

（阿部委員）「誰もが個性の輝きをはなつ市民活動の息づくまち」でいいと思うんです。というのは、「成熟社会」というと何かもう到達してしまう感じがするんですよね。そんなことを意識していないと思うんですよ。成熟社会はちょっと言い過ぎだな、と思って、それがこれに代わるだけでいいんじゃないかと思うんですよね。

（村上委員）「成熟社会」というのはもしかしたら、ビジョンの説明の文章で触れる形にして、コンパクトに、中学生くらいでもわかるような表現にするのであれば、「一人ひとり」とか、「誰もが」でもいいんですけれど、「一人一人が輝きをはなつまち」とか「市民活動が息づくまち」とかっていう、形にシンプルにして、説明の中で成熟社会とか個性が尊重されるようなものを持っていくのもいいのかな、と思います。ちなみに、今の計画のビジョンって・・・。ちょっとよくわからないですよね。

（中島委員長）坂井委員が成熟社会っておっしゃったのは、この言葉の中に、皆さんが議論されているプラスの面もあるしマイナスの面もあるし困難な面もあるし新しいチャンスもあるし、という・・・。
（坂井委員）まぁ、今までのような右肩上がりのまちではないという、いろいろな要素をふくんだまち、という、思い付きの言葉なんですが。そこを例えば「ふじさわ」に変えてしまってもいいと思うし。「地域づくり」という言い方をしてももいいし。
（中島委員長）村上委員がおっしゃったように、誰が見てもわかりやすいっていうのは大切かもしれませんね。中学生くらいが見てもわかる単語で構成させる、というのはいいかも知れませんね。
（山岡副委員長）市民活動推進ビジョンなので、「市民活動」って語はあったほうが、私はいいかなって。
（坂井委員）上と下はつなげるよりも別々のほうがいいと思います。
（中島委員長）坂井委員がおっしゃったのは、「市民活動が息づくまち」と「誰もが輝きをはなつふじさわ」のことですね。例えば。
（細沼委員）下に３つつくので、あまり長いと。うちの息子はビジョンっていうのは言い切りというかコンパクトにパってあったほうがよい、と青年の意見ですが。
（中島委員長）そのパっていうのが、上ですかね。「市民活動の息づくまち」。それの説明として。
（細沼委員）でも皆さんから意見もとてもいいので、「ひとりひとり」とか。キーワードとして、いい言葉がたくさんあるので、うまくつなげられたら。
（山岡副委員長）短くするなら「はなつ」をとって「輝く」でつなげてもいいんじゃないかと。
（西貝委員）思い浮かばないんですけれど、「もっともっと輝く」みたいな言葉はないですかね。今よりももっと輝く、未来に向かって輝く、みたいな。輝きを増す、みたいなことが何かないかなって。例えば、そこに輝く未来、って入れると、じゃあ、今は輝いていないのかって言われることもあるから、何かこの計画の先にはもっと輝いたものがあるよ、というのがちょっと入っているといいなぁ、って思ったんだけれど。
（木村委員）私も自分としてのワードが思い浮かんだわけではないんですが、一番上の「市民活動の息づくまち」っていうのは、目指す状態ですよね。どんなふうになるか、という状態だと思うんですけれど、副題として次に何か考えるとすれば、何かしていこう、とか動的なというか動詞のようなものが何かあるといいのかなぁ、と思ったんですが。
（坂井委員）提案しておいてですが、今の話と全く同じで、２行目は動詞で終わりたいな、って感じはしたんですよね、自分でも。
（西貝委員）よくあるのは、「～」って書いて、「一人一人がもっともっと輝こうふじさわ～」みたいなね。下に動きのようなものがあると・・・。
（細沼委員）輝こう、のほうがいいですかね。

（仲田委員）「個性の輝き」、この「個性」っていうのが好きなんですけれど。とっちゃうと普通になっちゃうなぁ、って。「一人一人」だと。好みですけど、「個性の輝き」って素敵だなって。

（坂井委員）「はなつ」って言ったのはちょっとだけ未来系の気持ちが入っているんですよ。

（阿部委員）意味としては、輝かせよう、ということなんでしょうけどね。勝手に輝くんじゃなくて。

（濱野補佐）先ほど副委員長がおっしゃった「つながり」ということがすべてのキーワードなのかな、って思っていて、ただ、つながりって普通にあるだけではつながっていいかないと思うんですよね。そこに潤滑油的なところが必要であって、その潤滑油は何かな、っていうと、今世の中ってストーリーで動いている気がするんですよね。例えば、ドコモの CM とか見ても、スマートフォンの CM じゃなくて、生き方とかの中でスマートフォンをどうするのか。ホンダの CM もそうなんですよ。車の CM とかでも何でもないんですよ。そういうのがきっかけでわくわく感とか楽しみを共有できるような仕掛けを作っていくような。話がずれてしまうかもしれませんが、そういうビジョンであってほしいな、って思っていたんですが。

（西貝委員）そういう点では、例えば、「一人一人が輝き　つながるふじさわ」とか。一人一人が輝くんだけど、それにまたつながっていくんですよ、って、それが市民活動が息づくってことになるのかな、と思いますね。「個性が輝き　つながる」でもいいですけれど。

（宮原参事）今の西貝委員のは個性の輝き「を」つなげていくということですか。

（西貝委員）どっちでもいいです。個性の輝きをつなげていってもいいし、一人一人が輝きながらつながっていくという、単純なものでもいいです。

（坂井委員）ビジョンなのであまり説明調にならないほうがいいな、と思ったのが一つと、つながらなくても個人的にでも勝手にやっていれば、それはそれでありだと思うので、その状態を強要するようなビジョンにならないほうがいいのかなと思って、つながることで、一人一人が輝くことはあると思うんで、それも含んでいるよ、ということでいいんじゃないかと思います。それが３段階の「個人」「団体」「地域社会」でいいんじゃないかと思います。例えばですけれど、「市民活動が息づくまち」、その後ろに「ふじさわ」をつけてもいいかもしれませんが、そのあとに「ひとりひとりが個性の輝きをはなてるために」とかそんな感じの風にしてしまうやり方もあります。

（中島委員長）「ひとりひとりが輝くために」

（坂井委員）「輝けるように」

（手塚委員）最終的に出来上がった形が、藤沢らしさが出ていないと、平塚でもいいんじゃないの、鎌倉でもいいんじゃないの、っていうのはまずいでしょ。藤沢らしさっていうのは何かの形で入っていないといけないっていうのは、やっぱり、藤沢市全体が抱えている問題が誰が見ても、藤沢市が抱えている問題だってわかるような、そういうのが入っていないと。さっきのホップ・ステップ・ジャンプのジャンプのところに藤沢らしさがちりばめられていれば。ホ

ップ・ステップのところは今までの状態を少しでもよくしよう、というところだからそれは鎌倉でも逗子でもどこでもいい。だけど、ジャンプのところには、やっぱり藤沢らしさがボンって出ていないと、藤沢の推進計画、ビジョンというのはちょっと、って感じがするけど、どうですかね。全体の流れはいいんだけど、まとまったものができたときに、本当に藤沢のものなの、って。

（中島委員長）市民活動の積み重ねっていうのは、神奈川県はどこの地域も積み重ねがあるので、藤沢らしさとは言えないのかもしれないですけれど、ただ、この委員会の議論って、たぶんさっき事務局が言ってくださった、何かのために、というのが多いと思うんですよ。でも、この委員会は特殊だと思うんですけれど、個がすごく重視される。個の充実というのが重視される、すごく。それがもう大前提にある。横浜の話を引き出すと申し訳ないですが、横浜は市民活動推進条例が市民協働条例になってしまったくらいで、何かのために、そんなのばっかりです。でも、もともと歴史的には市民活動っていうのはあって、市民がそれぞれ活動することに価値がある、って打ち出したんですけれど、負けてしまって、でも藤沢は、今の議論を見ていると、委員の皆様の意見っていうのは、個人が、別に何のためにっていうのを抜きにして、一人一人が自分の暮らしだったり、それがほかの人につながったりする。そういう個人の活動が重要視されているっていうのが・・・。

（手塚委員）個人を出さなくてもいいんですよ。

（中島委員長）いやいや、それが藤沢らしさだと思うんですよ。皆さん無意識にそういう議論をされている。

（手塚委員）個人ということをあんまり表に出すと、ここに書いてある前書きのところに、役目っていうのがなくなっちゃう。

（中島委員長）ここに書いてある前書きはまた議論しようと思ったんですけれど・・・。

（手塚委員）全体の流れとして、役目をしてもらいましょうよ、っていう論調でしょ。

（中島委員長）それはね、押しつけがましいですよ。私からしたら。

（手塚委員）でも、個人の話になっているんだから、個人っていうそれがとても重要だっていう議論になっているんだから、それがさっき言ったように前書きを作るのが難しいよ、ってこと。役目とかっていうのはなくなっちゃう。個人を表に出すと、役割って言葉は個人と反するでしょ。

（中島委員長）いやいや。どなたかが利他的な活動、って言ってくださったんですけど、利他的な活動をしたいというのも自分自身の活動をしたいというのも個人の勝手ですから。西貝さんがおっしゃったように、利他的な活動っていうのは個人の想いですから。

（手塚委員）それを文章に書こうとすると、非常に難しいんじゃないですか。それじゃ何をやってもいいのかよ、ってことになってしまうんじゃないですか。

（中島委員長）何をやってもいいと思いますけれど。何をやってもいい環境を整えるのが、推進計画で、その中から、誰かが団体を作ろうと思ったらそれを支援するし、誰かがつながろう

と思ったらつながるし。
（手塚委員）そこのところが、役目と個人っていうのが、ぐるぐる回りになっているから非常に難しい。
（中島委員長）役目って考えてしまうと、みんなそういう風にしなければいけないというようにとらえられてしまうと、それは違う。それは今まで、さっきからおっしゃっている、一般の市民の方が市民活動に踏み込めない一番の壁だと思うんですよ。誰かのためにしなければいけないのかとか、役に立たなければいけないのかって考えだしたら、躊躇しますよ。責任だってありますし。やりたいことをみんながやってそれが社会のためになる、ソーシャルキャピタルなんて全くその通りで、別に何のためにソーシャルキャピタルを作るってわけではなくて、勝手に人がつながることが豊かな社会を築くってことですから、別に何のために、ってことはないですよ。
（手塚委員）みんなが言ってたんじゃ、一つの方向に持っていけないから、ある程度、俺が俺が、私が私が、っていうことも必要だけれど、それが全部が主張しだしたら、組織っていうものは成り立たないでしょ。最終的には、そういうことをやりながら、一つのところにまとまって、ビジョンを達成していこうって風になるでしょ。個人個人が元なんだけれど、最終的には意見が統一されて、ある程度のビジョンを作る、それが推進計画でしょ。
（中島委員長）そういう風にしたい人はすればいいし、したくない人は個人のままでやればいいし。
（手塚委員）だから、そういう状態を推進計画の中に、こういう人もいる、こういう場合もある、って書くのは、書ければいいけれど、それをどうやって書くかが難しい。
（中島委員長）市民活動ってものが、そういう風に、やりたい人は組織化するし、やりたい人は協働するし、でもそのスタートっていう市民活動っていうのがあって、その市民活動を推進しましょうって。何のためにとか、何をしようとかじゃなくても・・・。
（手塚委員）何のために、っていうのじゃなくて、役割っていう言葉を使わないと、最初の「はじめに」の文章が成り立たないんじゃないかって。個人個人って前面に押し出すと。
（細沼委員）団体においても、一人一人の個性が出てくると思うんです。それがやっぱりいい部分が出て、団体活動ができていくわけだから、この一人一人は「個々」っていうんじゃなくて、でもこれ読むのって、一人一人なわけだから、読んで、ちょっと市民活動をやってみようかな、っていうのが、一番大事なことじゃないかなって思うし、逆に今まで団体活動していた人がこれを読んで、一人一人輝くって、藤沢ってそういうまちなんだ、みたいな風に感じてくれれば、一人一人でも、個人のことに感じないんじゃないかな。結局個人の塊じゃないですか。その中に、いろいろな個性があるわけで、今日はこの人がこんなことを言ってくれたみたいな、この人今日は生き生きとやっていたな、みたいなすごくあるので、それはそれでいいのかな、と思う。個性ってすごく大事なことで、自分にないものを持っているわけだから、輝きを、素晴らしさをその人が読んだときに、一人でもやれるけど、どっか団体入りたいな、って思った

ときに、どこの団体に入ったら自分が生かせるのかなっていうのがあれば、それがまたつながっていくんじゃないかな、って思うから、この中に藤沢らしさっていうのを入れるのは、ここにも未来ってあるので、一人一人が輝く未来へ、みたいにしてもいいし、青少協も子どもたちのためにって使っちゃうんですよ。でも結局自分たちが楽しんでやっているのがあるんで、さっき委員長がおっしゃった、何とかのために、っていうのも古臭いというか、一緒にやっていきたい、じゃないと続いていかないんじゃないかなと思います。

（手塚委員）それは大賛成で、そういう意見もあります。だから、もし前文を書くとすると、藤沢市は個人を尊重した集まりを、個人個人がやった集まりの団体もあるし、一つの目的をもって集まって市民活動をする団体もあるし・・・。

（中島委員長）それは、団体じゃないですね。

（手塚委員）それはいいんだけれど、それをどうやって文章化するのか、ってこと。文章化できないんじゃないかって。

（中島委員長）「ひとりひとり」とか「誰もが」っていうのが個人的にとってもいいと思うのは、一人一人が輝くため、って、さっきも言ったように、勝手に輝ける人って限られているんですよ。相模原の事件があったときに、障がい者の支援の時に、「この子らは世の光」ってありましたけど、要するに障がいを持つ方が主人公になれる社会って、とってもいい社会なんだってメッセージですけれど、「誰もが」とか「ひとりひとり」というのは実は重いメッセージなんですよ。一番条件の不利な人もきちんと支援されて、輝ける道を用意しますよ、っていうメッセージですから、すごく包摂的なメッセージだと思うんですよね。

（手塚委員）事務局側に聞きたいんだけれど、推進計画の中に入っている市民活動をやっているいろいろな人たちのことを個人として考えているのか、団体として考えているのか、どっちなんですか。個人もあるし団体もある？

（宮原参事）あまり区別していません。

（手塚委員）そうすると、これ書けますよ。区別していないんだったら。団体であろうが、個人であろうが区別していないのであれば、前書きは書ける。ここにある前書きは団体であることを意識して書いているんだよね。役割を担う、ってことだから。

（宮原参事）この文章については、ビジョンがない中で想定で書いたものなので、これはまだまだ直さなければいけないと思いますが、いま議論をすべき話ではないと思いますので・・・。

（阿部委員）手塚さんがおっしゃることも良く分かりますけど、委員長がある程度の想いを持ってらっしゃるんで、書けるという風に、一応ビジョンを持ってらっしゃるんで、お預けして。進める方向は問題ないわけですよね。書けるかどうかが問題なんで。書けないとここで判断することもないと思うんで。

（中島委員長）金子委員の一番最初に言ってくださったのが、個人を重視して、自立した個人がつながる、っていう概念ですよね。考え方ですよね。やっぱりつながるためには、個人がなきゃつながらないはずなんだよね。団体にしたって。楽しく参加しなければ長続きしないです

し。
（阿部委員）確かに活動っていうと、個人で活動するかって言うとはなかなか難しい話なんです。だから、何人か集まって活動ということになるんでしょうけど、やっている単位は個人でしょうから、それでいいと思うんです。後の施策のところで、そんなことにお金を投資するか、それは優先順位がある話であって、やっぱりビジョンとしては、みんなでやりましょう、その中でこれは重要だから、投資しますんですよ、っていうのがあっていいと思うんです。ですから、ビジョンの部分はそれくらい大きく含んでいて、いいと思うんですけれど、いかがでしょうか。「みなさんの活動が未来を創る」とまで言ってしまってもいいと思うんです。
（木村委員）今おっしゃったように、未来を創る、輝きの起点になって、それがつながると未来が創られるんですよね。そこをサブで入れるととても美しくなるのではないかと。
（中島委員長）「市民活動の息づくまち　ふじさわ」にね。
（木村委員）創るってことで、当事者意識も出てくるでしょうし、動的な部分も入ってくるので。
（中島委員長）木村委員がおっしゃったように、こっちが与えるんじゃなくて、市民の方が主語のほうがいいですよね。当事者っぽいから。輝くは自分で輝けばいいし。
（木村委員）やっぱりつながることによって、さっき委員長がお話しされていましたが、なかなか自分では一人だけでは輝ける人はそうそういないし。組織の中で、よく言うじゃないですか、自分でモチベーションをもってぐいぐい進んで行く人が全体の２割、残りの６割の方っていうのは、そういう方とのつながりとか、触発される中からどんどん自分でできる人になっていく、残りの２割はどんなことがあってもなかなか動かない。いろいろな組織の考え方があると思うんですけれど。
（中島委員長）キーワードをいただいたので、この辺の中から、作りますか。その３つくらいの基本指針につながるような、柔らかい言葉。
（西貝委員）手塚さんが言っていた、藤沢らしさって、逆に、ひとりひとりが、っていうのは藤沢らしさだと思うんですよね。だけど、根本的になぜこれを作っているのかって言ったら、市民の力がこれからの藤沢のまちづくりに求められているっていう条例が基本になっているので、それがいいかどうかって問題はあるかもしれませんが、これの基本はそこなので、そういうところがあるんで、そこのところをとらえていれば、個人が、団体がっていうことだけじゃないと思うんですよね。結局それが大きくまちに影響してくるってことなんで。藤沢らしさ、っていうのは「一人一人が」っていうことだし、それがこれから先の藤沢の地域社会を、個人を含めて、未来を創っていこうってなって、市民活動が息づいていくんじゃないかと思います。
（中島委員長）事務局どうしましょう。
（宮原参事）お預かりさせていただきます。Vers.4 として皆様に早めに提供させていただきたいと思います。貴重なキーワードをたくさんいただきましたので。
（中島委員長）手塚委員が言ったことは施策のほうに入れられるんですよね。具体的な施策に。

（手塚委員）藤沢らしさっていうのは、５～６年前に市民活動推進センターを中心にして、具体的なアンケートを取ったんだよ。対外的なアンケート、街頭アンケートをしたんだよ。祭りのときに。

（中島委員長）では、事務局から何かありますか。

（濱野補佐）長い間ご議論いただき、ありがとうございました。本来でしたら、お話しさせていただきたかった件があるんですけれど、これも皆さんいろいろと案やアイデア、こうしたほうが良いとか、ここはもう少し力を入れたほうが良いとか、いろいろな案がそれぞれお持ちなのかなと思いますので、多分普通にやったら１時間くらいかかってしまうということもありますので、これについては、この絵を後日メールでお送りさせていただきますので、それを個人個人でこうしたほうがいいんじゃないかっていうのを、締め切りをもうけさせていただいて、事務局のほうに提出いただいて、それを集約したものを次の推進委員会のほうで調整といいますか、意見を交換していただきたいと思っていますので、今日はちょっとここで申し訳ないんですけど・・・。

（中島委員長）ビジョンとか基本指針とか出た後の、施策の部分ということですよね。どっちかというと。

（濱野補佐）そうですね、施策の部分が大きいのかな、と思います。これだけ見ていただくとわかるように、矢印一本にしても、重点を置いている部分と、点線、そこの大学等の学校とか、ほぼ関わりがない、っていう。大学生の個人単位で市民活動推進センターとインターンをやられているというのはあるんですが、そういうところの強弱があったりするので、そこら辺のところをまた、こうしていったほうがいいんじゃないかってことがあれば、ご意見いただければと思います。

（中島委員長）今までの計画もそうなんですけれど、施策に方位するとどうしても団体とか協働とかがすごく強くなるんですよね。

（濱野補佐）そうですね。今の現計画については、いろいろのご議論あった部分ではあるんですが、基本的には市の政策とかそういうものについても、団体が中心になっているというところで、今回新しくなるものが個人も重視していくということですと、これはあくまでも現計画でいうところの団体向きの制度の部分であるのかな、というところもありますんで、プラスアルファで個人の部分をどういう風にするのか、ということと、ちょっと気になるところは推進センターがその部分を新たに担っていけるか、というのが気になる部分ではあるんですけれども。

（手塚委員）NPO っていうところは、NPO じゃなくて、市民の集まりじゃダメなの。

（濱野補佐）そうですね、市民の集まりっていうのが、この分け方もどうなのかな、という議論はあると思いますが、これはざっくりとしたつくりなので、例えば地域住民と書いてあるところが、市民の集まりにあたるところかな、と思うんですけど、地域住民というと全体を網羅してしまうところもあるんで、本当に、多分そこは議論になってしまうと、これから進まなく

なってしまうので、ざっくりの中で、こういう風にやっています、というための表です。
（手塚委員）議会というのはないの？
（濱野補佐）議会は入っていないんですが、手塚委員に入れていただいてこちらのほうにいただければ検討いたします。
（阿部委員）一つだけ。青少協ってどこに入りますか。地域団体ではないんですよね。
（濱野補佐）そうですね、小さく自治会・町内会って書いてあるんで。
（阿部委員）地域で７団体というのはかなり活動している市民活動団体ではあるんですが、この議論からは全く抜けているんですね。
（濱野補佐）これはあくまでも、市民自治推進課の交付金の決定が自治会・町内会というだけなので、ここに入っていない団体さんも市民活動やっているよ、っていう団体さんもいっぱいあると思うので。
（仲田委員）宿題は引き続き、ありってことだと、今この段階だといろいろ組み替えて皆さんが出したとしても何かまとまったものになりにくいのかな、って。多分、こちらの視点が、今、市民活動支援施設を中心にされて、書かれている、交付金なんかの流れも含めて書いてある図だけれど、今の段階で、ビジョンは何となく見えてきたけれど、施策も含めてある程度あった中で、その市民活動に対する図がほしい、最終的な目的はそこですよね。
（濱野補佐）これはあくまでも現状の図ですので。
（仲田委員）ですよね。施策がない中で、何か図を、っていうのは結構ハードルが高いというか。
（濱野補佐）施策が決まっていないということもありますし、逆に、この現状で、こういうところが課題だよ、っていうところが施策に代わる部分もあると思いますので、確かに、たくさんの意見が集約できない可能性も出てくるのかな、ということもありますが。
（仲田委員）それぞれの四角の中もこの分け方でいいのかな、ということもあるんで。
（濱野補佐）それもあると思います。本当にこれはざっくりのものなんで。
（中島委員長）全くその通りで、結局この枠組みで議論してくださいって言ったら、議論できると思うんですけれど、それが私たちが作ろうとしてる推進計画であっているのかっていうのは、まったくわからないので。
（濱野補佐）これは現状なので、固定というわけではないです。これを基盤にして考えてください、ってわけではないので。あくまで、現状のざっくりの状況です。
（中島委員長）では、以上で議題１「市民活動推進計画の改定」についてを終了します。では、市民活動推進委員会第２回分科会を終了いたします。ありがとうございました。